

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は1996年に発足し、今年で18年目を迎えた。本年は「家政学、家庭科教育の進むべき道～分野横断・大学間連携の意義～」と題し、講演会を企画した。大会2日目の5月25日（日）15：15～16：45 西日本総合展示場 AIMビル3階I会場にて開催され、参加者は22名であった。

本企画の目的は、「家政学の分野で活躍されている大学教員の方を講師としてお招きし、これからキャリアを積んでいく若手教員・研究者に対し、家政学各分野の横断的研究の意義、また大学間連携の意義についてご提言いただく」というものである。今回、2名の講師の先生方にご講演いただき、質疑応答の時間を設けた。

薩本弥生氏（横浜国立大学）からは、現場の先生のための教材開発や海外での交流等を目的に進めてこられた「着物の文化・伝承・発信」のご研究を中心に、分野横断的研究についてご説明いただいた。ご講演の中で、分野横断的研究のメリットとして「背景の異なる研究者が共同研究を行うことで、1+1=2以上の成果となる」、「研究のブレイクスルーになる」といった点を挙げられた。一方で「分野によって成果となるニーズが異なり、着地点のすり合わせをどうするかが難しい」といった分野横断型研究の難しさについてもご紹介いただいた。さらに、今後若手研究者が研究を進める上で必要なこととして、「①自分の専門の中で強みを持つ」「②横断的に学会に参加する」「③研究環境の発掘と最大限の利用」の3つをお示しいただいた。

坂田隆氏（石巻専修大学）からは、複合領域における研究が必須であり、他領域の発表等を聴く中でアイデアを浮かべてきたというご経験談を交えながら、分野横断的研究の重要性と、研究を進める上で心構えについてご説明いただいた。ご講演では、「総合力で勝負することは重要であり、そのためには、好奇心を持ち、専門外の内容も評価できるようになることが大切である」、「分野横断的研究を進める上で、『自身の専門については論理・方法論をしっかりと持って本職を作る』とともに、『専門外にも柔軟に対応し、理解するだけでなく、他領域の人にも説明できるようになること』が必要である」などのご助言をいただいた。また研究を進める上で、本当にやりたいことを持ち、回り道をしても執念深く取り組むことの大切さについてもお示しいただいた。

質疑の時間には、お二人の先生方へのご質問に加え、坂田先生から参加者である若手研究者の方へのご質問もいただいたことで、若手研究者の意見交換の場にもなった。

企画終了後のアンケートでは「実際の研究の様子と心構えを学べ、今後に役立つ知見が得られた」、「いろいろな人とつながる」と「専門の柱を持つ」の両方はとても大切だと思う」などのご意見が寄せられた。またご回答いただいた全ての皆様から「若手研究者にとって、研究・教育を行っていく上で、このような講演会をはじめとするスキルアップや交流の場は必要」とのご回答が得られた。

今回、先生方から若手研究者が多くを学ばせていただくと同時に、ご参加いただいた方からのご意見によって問題意識の共有や交流を図ることができた。今後も家政学研究の発展のための交流の場となるように、若手の会の活動を推進していきたい。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/) 上に公開している。

（若手の会幹事一同、文責・安岡 絢子）